石川看護研究会　Journal of Ishikawa Society of Nursing Research, Vol.11, No.1, pp.17～23, 1998.

論　　文

退院した放射線治療患者の皮膚障害と治療に関する認識調査

中尾　弥生・大西　雅子・前多　公子
（金沢大学医学部附属病院）

A Survey of Perceptions Concerning Radiotherapy and Radiation-Induced Skin Damage among Patients Discharged after Having Received Radiotherapy

Yayoi Nakao, Masako Onishi, Kimiko Maeda
Kanazawa University Hospital

要　　旨

放射線治療患者は，治療による副作用が治癒することなく退院を迎えることも多い上に，放射線に対するマイナスイメージの存在によって，治療後もさまざまな不安や疑問を抱いていると思われる。そこで，放射線治療を受けた患者の治療後の認識について明らかにするために，退院後の放射線治療患者25名に対し，放射線治療による皮膚障害の変化と治療に関する認識について実態調査を行なった。治療に関する認識については，患者の思いとして治療に対する不安，イメージ，自己評価，患者の考え方の４項目と，更に患者の治療に対する思いに影響すると考え，患者から見た周囲の人の治療に対する理解の程度について調査した。その結果以下のことが明かとなった。

１．退院時残存していた皮膚障害は全ての者が改善もしくは改善方向にあったが，皮膚障害以外の新たな副作用の出現を心配している人が約70％いた。

２．患者は治療後にも放射線治療に対する誤った認識を持っており，退院した現在も不安や疑問を抱いている人が約70％いた。

３．患者の中には治療後も放射線に対する怖い・避けたいといった社会通念が残っている人が約70％いた。

キーワード

退院，放射線治療患者，皮膚障害，認識

Abstract

Adverse radiation－induced reaction and negative images that people have about radiation can precipitate their having unfavorable views about radiotherapy in general. To date, no survery has been published that has been designed to investigate and analyze these factors. We recently conducted a survey of 25 patients who were discharged from hospitals after having undergone radiotherapy, concerning their awareness and views about radiotherapy－induced skin damage and radiotherapy itself. We also studied how people in the patients' environments, felt about the patients' receiving radiotherapy. The following results were obstained.

1. Skin danage that had not healed at the time of discharge had become reduced ortended toward reduction. However, many patients were anxious about the possible development of some new adverse reactions in the future.

2. Eve though they had actually received radiotherapy, the patients often had misunderstandings about that form of treatment. Many patients remained anxious or doubtful about radiotherapy even after completing their treatment.
3. Despite their actual experience with radiotherapey,many patients were still affected by the idea, held by many people in our society, that radiation is dreadful and something they want to keep away from.

KeyWords

discharged, patents after radiotherapy, skin damage, perception

はじめに

放射線治療は，放射線の感受性の違いを利用して癌細胞のみを死滅させ治癒を導く治療法であり，手術療法・化学療法と並び悪性腫瘍に対する三大治療法の一つとされている[1)]。しかし，放射線治療は腫瘍を対象としているものの，その対象が正常細胞に囲まれて存在していることが多く効果とともにさまざまな身体症状（副作用）を伴うことが多い[1)]。特に視覚的にも著明な皮膚障害は身体的のみならず精神的な苦痛ともいえる。臨床の場においては，このような皮膚障害が治癒することなく退院を迎えるケースも少なくない。また，社会一般に「放射線」や「放射能」という言葉に対し，怖い・避けたいと言ったマイナスイメージがあるといわれている[2)]。患者が新たな治療を受ける場合，治療に対して不安や期待を抱いていることが多い。この不安や期待は，治療に関する理解の程度によって違いが生じ，治療の受け入れにも大きく影響するものと思われる。放射線治療においては，治療を容易に受け入れられたとしても，さまざまな副作用の残存や「放射線」に対する怖い・避けたいといったマイナスイメージの存在により放射線治療に対するマイナスイメージが生じ，治療後においてもさまざまな不安や疑問を抱いているのではないかと思われる。しかし，退院時残存していた皮膚障害の変化や放射線治療に対する「放射線」と同様な怖い・避けたいといったマイナスイメージに関する報告はされておらず，放射線治療を受けた患者の退院後における不安や疑問について明らかにされていない。そこで，本研究は，退院後の放射線治療患者の治療に対する認識を明らかにするために，放射線治療による皮膚障害の変化と治療に対する思いについて実態調査を行なった。また，患者の治療に対する思いに影響すると考え，患者から見た周囲の人の治療に対する理解の程度についても調査した。

対　象

金沢大学病院放射線科病棟入院中に放射線治療を経験し，平成８年８月～平成９年６月に退院した患者54名中，入院中および退院時にも皮膚障害が残っていた25名（46.3%）とした。

方　法

調査は，放射線治療による皮膚障害，および放射線治療に対する患者の思いと患者から見た周囲の人の放射線治療に対する理解の程度に関する認識を明らかにするための質問紙を作成し，平成９年８月に質問紙調査を行った。なお，倫理的配慮として，調査については電話にて事前に説明し，了解の得られた対象にのみ質問紙を郵送した。対象の背景として年齢，性別，病名告知の有無，病名は看護記録により情報収集を行なった。放射線治療については，照射部位，治療に使用した放射線の種類，総照射線量，退院時残存していた皮膚障害の程度について看護記録とカルテより情報を抽出した。

１．放射線による皮膚障害の調査内容

退院時残存していた皮膚障害については，現在の障害の程度，晩期障害の出現の有無，障害の残存期間，治療に対する心配の有無について調査した。障害の残存期間については，対象個々の退院日を基点とした。更に，治療中の注意点である摩擦を避ける，直射日光を避ける，塗布剤の使用を避ける，クーリングの継続の４項目について退院後の状況について調査した。

２．放射線治療に対する思いの調査内容

治癒に対する思いとして，放射線治療に対する不安，イメージ，自己評価，患者の考え方を調査した。

１）放射線治療に対する不安

治療を受ける前の不安の有無を振り返り調査した。また，現在の治療を受けたことに対する不安の有無とその不安の内容について調査した。

2）放射線治療に対するイメージ

放射線治療に対する放射能や原爆に似たイメージの存在の有無について，治療前と治療後に調査した。

3）放射線治療に対する自己評価

治療を受けたことに対して，治療を受けて良かった，受けないほうが良かった，わからないの3段階で患者自身に評価してもらった。

4）放射線治療に関する患者の考え

治療に対する患者の思いや考えを自由に記述してもらった。

3．患者から見た周囲の人の放射線治療に対する理解の程度の調査内容

周囲の人の放射線治療に対する理解の程度について，理解していると思う，理解していないと思う，わからないの3段階で患者自身に調査した。更に，放射線治療が原爆や被爆に関係がある，放射線治療を受けたことで周囲の人にも何らかの放射線の影響があるといった誤解を受けたことがあるか調査した。なお，これらの質問については，周囲の人を家族（同居している者もしくはキーパーソンとなる者）と知人（親戚や友人などの知り合い）に分けて質問した。

結　果

質問紙の回収率は100％であったが，1項目以上の無記入のあった2名を省き，有効回答率は23名（92.0％）であった。

1．対象の背景

対象の背景については表1に示した。対象の平均年齢は54.5±19.6歳であり，性別は男性7名（30.4％），女性16名（69.6％）であった。病名は乳癌が最も多く，次いで脳腫瘍，肺癌，非ホジキンリンパ腫の順であり，併せて照射部位も乳房，頭部，縦隔，頸部の順であった。なお，照射部位においては原疾患のほかに転移巣への照射を並行して行っている対象も2名あったが，転移巣における照射部位には皮膚障害は認められなかった。

表1　対象の背景

平均年齢	54.5±19.6歳		
性別	男性	7名	(30.4%)
	女性	16名	(69.6%)
病名告知あり		20名	(87.0%)
病名	乳癌　（乳房）	13名	(56.5%)
	脳腫瘍（頭部）	5名	(21.7%)
	肺癌　（縦隔）	4名	(17.4%)
	非ホジキンリンパ腫		
（照射部位）	（頸部）	1名	(4.4%)
	10MVX線	15名	(65.2%)
	4MVX線	6名	(26.1%)
放射線の種類	電子線	2名	(8.7%)
総照射線量	30～66Gy		
皮膚障害の程度	発赤	3名	(13.1%)
	掻痒感	4名	(17.4%)
	疼痛	4名	(17.4%)
	色素沈着	7名	(30.4%)
	乾燥感	2名	(8.7%)
	びらん	4名	(17.4%)
	脱毛	5名	(21.7%)

2．放射線治療による皮膚障害

退院時残存していた皮膚障害については，調査時点できれいに治っていた人が13名（56.5％），治る過程にあった人が10名（43.5％）であり，退院後全ての人が改善もしくは改善方向にあった。また，放射線治療後6カ月以上に出現すると言われ

る晩期障害が出現している人はいなかった。対象個々の退院日を基点として皮膚障害が残存していた期間は，2～3カ月程度が9名（39.1%），3カ月以上が4名（17.4%）であり，比較的長期残存していた人が半数を占めた。しかし，皮膚障害の治癒に対して，特に心配していなかった人が12名（52.5%）を占めており，その人たちの皮膚障害残存期間は6名（26.1%）が2カ月以上で，比較的長期残存していた人であった。現在も照射部位に対し注意していることとして，摩擦を避けている人が15名（65.2%），直射日光を避けている人が11名（47.8%），塗布剤の使用を避けている人が9名（39.1%），クーリングを継続している人が1名（4.4%）であった。

3．放射線治療に対する思い

1）放射線治療に対する不安

放射線治療に対する不安では，治療前に治療を受けることへ不安があった人が19名（82.6%），現在治療を受けたことに対して不安がある人が16名（69.6%）といずれも不安を抱いている人が多かった。現在抱いている不安の内容を表2に示した。放射線治療による他の部位への影響に関する不安とは，現在も放射線が体内に残っている，あるいは照射部位以外にも放射線があたっており，症状はないが何らかの影響が出現するのではないかといった不安である。治療を終えた現在治療を受けたことに不安があると答えた全ての人が，このような放射線治療による他の部位への影響に関する不安を抱いていた。また，皮膚障害以外の新たな副作用の出現に関する不安とは，退院時残存していた皮膚障害が一度は改善してきているものの，晩期障害を含め再燃するのではないかといった不安である。皮膚障害以外の新たな副作用の出現に対する不安に関しては，対象の背景に特徴は見られなかった。更に，治療による周囲の人への影響に対する不安とは，放射線治療を受けたことで自分が放射線の媒体となり，他の人に何らかの影響を及ぼすのではないかといった不安である。このような治療による周囲の人への影響に関する不安を抱いている人は，対象の中でも最高齢にあたる80歳代の2名であった。

表2　現在抱いている不安　（複数回答）

放射線治療による他の部位への影響	16名	(69.6%)
皮膚障害以外の新たな副作用の出現	14名	(60.9%)
治療による周囲の人への放射線の影響	2名	(8.7%)

2）放射線治療に対するイメージ

放射線治療に対して放射能や原爆に似たイメージを持っていた人は，治療前が19名（82.6%）おり，さらに治療後においても16名(69.6%)と多かった。また，治療前にはこのようなイメージはなかったが、治療後新たに生じていた人が3名(13.1%)いた。

3）放射線治療に対する自己評価

患者自身が放射線治療を受けたことに対する評価として，治療を受けて良かったと思っている人は10名（43.5%），良かったかどうかはわからないと答えた人は13名（56.5%）であり，治療を受けないほうが良かったといった後悔を示した人はいなかった。

4）放射線治療に関する患者の考え

放射線治療に関する患者の思いや考えを自由に記述してもらい，その内容を表3に示した。放射線治療に関する患者の思いや考えの中には，放射線治療に関する誤った認識や理解の難しさ，また，治療効果に対する疑惑や副作用に関する苦痛などが上げられた。

表3　放射線治療に関する患者の考え

①放射線治療に関する誤った認識	・照射によって骨が脆くならないか ・マーク以外の所にも放射線があたっていたのではないか ・照射部位から放射線が全身へ浸透しているのではないか
②放射線治療に関する理解の難しさ	・医師の言う通りにするしかなかった ・いまだに放射線治療についてわからない ・おそらくほとんどの人が放射線治療について理解していないと思う
③治療効果に対する疑惑	・効果はどれくらいあったのか
④副作用に関する苦痛	・副作用について聞いていたがこんなにつらいとは思わなかった ・退院してから脱毛には困っている

4．患者から見た周囲の人の放射線治療に対する理解の程度

周囲の人に放射線治療について話したことがある人は16名(69.6%)と多かった。しかし，家族及び知人の放射線治療に対する理解については，家族は理解していないと感じている人が8名(35.2%)であり，知人においては12名（52.5%）であった。また，知人により，放射線治療が原爆や被爆に関係があるのではないかといわれたことがある人が6名（26.1%），また放射線治療を受けたことで周囲の人にも何らかの放射線の影響があるのではないかといわれたことがある人が2名（8.7%）いた。

考　察

1．退院後の放射線治療による皮膚障害の実態について

放射線治療による皮膚障害は，色素沈着・脱毛などの視覚的変化と疼痛・乾燥感などの感覚的変化があるが，いずれも患者にとっては苦痛と考える。しかし，今回の調査では，このような皮膚障害が2カ月以上と長期間残存していたにもかかわらず，治癒に対して心配していなかった人が半数を占めていた。これは，現在皮膚障害が改善していることや障害が治療の一過程であり徐々に改善していくものと患者が認識していることにより心配の程度が小さく現れたものと考える。その反面，照射部位に対しては，現在も摩擦や直射日光を避けるなど注意して生活している人が60%を超えており，治療後も照射部位への関心の高さが感じられる。特に摩擦や直射日光を避けることは，放射線によって障害を受けた皮膚をさらに悪化させる要因として治療開始前のオリエンテーションから指導していることもあり，退院後改善している皮膚障害が再燃しないよう，現在も注意している人が多いのではないかと思われる。臨床の場においては，皮膚障害が治癒することなく退院することも多く，残存している皮膚障害が時期に改善していくことや悪化した場合の外来受診について助言していく必要がある。また，皮膚障害に関する患者の不安や疑問に対して，退院後もサポートしていくことが重要である。

2．放射線治療に対する思いの実態について

現在も放射線治療に対して不安を抱いている人が約70%と多かった。面本らは，放射線治療を受ける患者には，疾病に対する不安・予後や治療効果に対する不安・副作用の対する不安・誤った知識から生じる不安・治療に対する未知なる思いや漠然とした思いから生じる不安があると述べている[3]。今回の調査においても，「照射によって骨が脆くならないか」「マーク以外の所にも放射線があたっていたのではないか」「照射部位から放射線が全身へ浸透しているのではないか」などの誤った

認識をしている人がいた。放射線治療による他の部位への影響や皮膚障害以外の新たな副作用の出現といった現在の不安は，このような誤った認識により生じているものと思われる。また，「効果はどれくらいあったのか」「医師に言う通りにするしかなかった」「いまだに放射線治療についてわからない」といった意見もあることから，予後や治療効果に対する不安も大きいと推測される。治療前後にかかわらず，放射線治療に対して約70～80％の人が放射能や原爆に似たイメージを持っており，放射線に対する怖い・避けたいといった社会通念の根強さが感じられる。これは我国が唯一の原爆経験国であることが影響していると思われる。また，我国では悪性腫瘍の治療法として，手術療法，化学療法が選択される場合が多く，近年マスメディアを通してさまざまな社会的情報提供が行なわれている。しかし，悪性腫瘍の治療法として放射線治療の関与率が欧米で70％を超えるに対し，我国では20％前後である[1]。つまり，放射線治療の関与率は低く他の治療法に比べて社会情報提供が少ないことから，治療法としての認識よりも放射線という言葉が持つマイナスイメージが大きいのではないかと考えられる。特に，治療による周囲の人への放射線の影響について不安を抱いている2名は，対象の中でも最高齢者であった。これは過去の原爆経験が大きく影響しているものと思われる。放射線治療は，高齢者のような手術などの身体的浸襲の大きい治療法が適応とならない対象に行なわれることも多い。このような場合，高齢者に対する歴史的背景を考慮した対応が必要であると考えられる。また，放射線治療に対して放射能や原爆に似たイメージを持っている人が多かったのに対して，治療を受けないほうが良かったといった後悔を示した人はいなかった。本調査結果では，治療に対するイメージと治療の受け入れとの関係性は明らかにならなかったが，今後分析していくべき課題である。さらに，放射線治療に対する放射能や原爆に似たイメージが治療後に初めて生じた人が3名いたが，これは実際に治療を経験し皮膚障害という副作用の出現によって改めて放射線の驚異を感じたためと思われる。その他，「いまだに放射線治療についてわからない」「おそらくほとんどの人が放射線治療について理解していないと思う」といった意見があった。これは，経験だけで全てを理解するのは不可能であることを意味しているのではないだろうか。このように考えると，通常治療開始前に行なわれているオリエンテーションでは，放射線治療による副作用の説明やそのケア方法にとどまらず，「放射線治療とは何か」といった根本的な説明と理解が求められているのではないかと思われる。

3．患者から見た周囲の人の放射線治療に対する理解の程度

患者にとって最も身近な社会単位は家族であり，家族は患者を支えるサポート源となることが多い。そのため，家族を中心とした患者の周囲の人が放射線治療についていかに理解しているかは，治療を乗り越える患者をサポートする上で重要な意味を持つと考えられる。しかし，今回の調査では，周囲の人の放射線治療に対する理解の程度に関して，理解していないと感じている人が比較的多く，理解の程度は充分であるといえない。さらに，少数ではあったが，放射線治療が原爆や被曝に関係あるのではないか，放射線治療を受けたことで周囲の人にも何らかの放射線の影響があるのではないかといった誤解を受けていた人もいた。このような誤解は，放射線治療に対する患者の不安を増大させる恐れがある。周囲の人の理解の程度が低い理由として，放射線治療の関与率を踏まえ社会的情報提供が少ないことが考えられる。このような中で患者が前向きに治療を受け，その後も闘病意欲を高めた生活が送られるためには，社会的情報提供への働きかけを含め，家族の放射線治療に対する理解を高められるような関わりが必要であると考える。

以上の点を踏まえ今回の調査から，放射線治療に関する根本的な説明と理解の必要性・患者に対する治療後を含めたサポートの重要性・放射線治療に対する社会的情報への働きかけの必要性が示唆された。なお，本研究は振り返り調査であるため研究における限界がある。今後対象の選出や調査時期を考慮し，放射線治療に対するマイナスイメージとして放射線治療による副作用の出現や治療に対する患者の認識がどのように影響しているのかを明かにしてきたいと考える。

まとめ

退院した放射線治療患者を対象に放射線治療による皮膚障害と治療に対する認識について実態調査を行なった結果以下のことが明かとなった。

1．退院時残存していた皮膚障害は，全ての人が改善もしくは改善方向にあるものの，皮膚障害以外の新たな副作用出現を心配している人が約70％いた。

2．患者は治療後にも放射線治療に対する誤った認識を持っており，退院した現在も不安や疑問を抱いている人が約70％いた。

3．患者の中には治療後も放射線に対する怖い・避けたいといった社会通念が残っている人が約70％いた。

文　献

1）国立がんセンター中央病院看護部編：がん専門看護，㈱日本看護協会出版会，100-103，1996

2）草間朋子：放射能　見えない危険，読売新聞社，4，1993

3）面本真寿恵，他：放射線治療への不安とその受けとめ方の現状分析－面接を通して－，第23回日本看護学会集録（総合），146-148，1992